

## 侵华日军刻字遗迹を考える

橋本 実和（大学二年生）

侵华日军刻字遗迹とは、避暑山荘を囲む外八廟の一つである普陀宗乘之廟、通称小布达拉宮にある遺跡である。普陀宗乘之廟は乾隆帝の時代（乾隆 32～36 年）に建設された建物であり、現在は世界遺産にもなっているラサのポタラ宮を模している。通称である小布达拉宮の名はここから来ている。

そんな歴史ある建造物である普陀宗乘之廟は、1933 年 3 月に行われた日本軍の承德侵略の影響を受けている。日本関東軍による承德への侵略は 12 年続き、その間に軍は普陀宗乘之廟を含む多数の歴史ある建築物に文字を刻んだ。その負の遺跡として残っているのが侵华日军刻字遗迹である。画像からもわかるように、建物の補修工事も刻まれた文字を避けるように行われており、その大部分は当時と同様に保存されている。

中国への渡航を経て、中国という国家だけでなくその土地に住む人々との交流を通じ、その印象は渡航前の印象から大きく変化した。未だ自国と中国は国家間において様々な面での摩擦が生じているが、土地は雄大で気候にも恵まれており、農業や工業を含む国家事業も盛んで、人々は優秀な上に親切であり、非常に友好的な中国という国は、気候にも反映されるように穏やかで、多方面において感嘆する程優れていた。整然と区画整理が行われている都市計画に代表されるように、資本主義国家の弱みと社会主義国家の利点を渡航中に実感することも少なくなかった。

そんな中国であるが、地理的に距離が近いということもあり日本とも古くから交易等交流がある。その歴史は文献資料だけで『漢書』における「地理志」が記された紀元前 1 世紀頃まで遡る。現在まで連綿と続く歴史の中には、上記に挙げたような侵略行為も含んでいる。現代に生きる私たちが、歴史を学ぶこと、歴史に向き合うことの意味はここにある。渡航を通して、柏市国際交流協会会長である小菅あけみさんが仰っていた「世界中に友達を作ること」の価値を再認識した。渡航を通して、ホストファミリーはもちろん、様々な中国の方々と親交を深めることができた。中国という国がより現実味を帯びて感じられるようになり、今まで書籍を含むメディアの情報を受動的に受け取っていた自身の姿勢を反省した。能動的にその真偽を検討し、政治の主体と国民を分けて考えるべきであった。これからは、国際交流に向き合うにあたり、その国の歴史、風土、思想を学び、更なる理解に励みたい。

最後に、素晴らしい機会を下さった KIRA のみなさま、そして旅を通じて交流を深めた承德市のみなさま、この旅に協力して下さったすべての方々に深い感謝を述べ、報告書を終わりとす  
る。

